島根原子力発電所２号機資材運搬道路新設に伴う

氏穴遺跡発掘調査概報

1983年　3月

島根県　鹿島町教育委員会

島根原子力発電所２号機資材運搬道路新設に伴う

氏穴遺跡発掘調査概報

―池平城跡北１郭―

1983年　3月

鹿島町教育委員会

序

当鹿島町内では、史跡佐太講武貝塚をはじめ、古浦砂丘遺跡、銅鐸・銅剣を出土した志谷奥遺跡など著名な遺跡が数多く知られております。

今回は、島根原子力発電所２号機資材運搬道路が建設されることとなり、中国電力株式会社の協力を得て、中世山城の郭の発掘調査を実施したものであります。

中世城郭の調査は、町内でははじめてであるとともに県下でも前例が少ないこととあわせ考えますと、今回の調査は今後の中世山城研究の貴重な一資料を提供したと申せましょう。

ここに、発掘調査に対し、ご指導をいただいた島根県教育委員会、また終始ご協力いただいた中国電力株式会社をはじめとした関係各位に心から謝意を表し、報告書発刊のごあいさつとさせていただきます。

昭和５８年３月

鹿島町教育委員会

教育長　矢　野　義　雄

例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が中国電力株式会社の委託を受けて実施した島根原子力発電所２号機資材運搬道路新設に伴う氏穴遺跡発掘調査の記録である。
2. 調査は、昭和５７年９月１日から１０月２日まで実施した。
3. 遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷字氏穴（うじあな）２９１１－１番地に所在し、調査は以下の体制で行った。

事務局　門田正幸（鹿島町教育委員会教育次長）
　　曽田　稔（　　同　　社会教育主事）
調査員　赤沢秀則（　　同　　嘱託）

4. 調査にあたっては、中国電力株式会社、カナツ技研工業株式会社、有限会社鹿島測量設計社の協力があり、島根県教育委員会文化課卜部吉博、西尾克己の両氏からはご指導をいただいた。記して謝意を表する。
5. 本書に用いた方位は、全て調査時の磁北を示す。
6. 本書の編集・執筆は直接調査を担当した赤沢があたり、一部を曽田が担当した。

目　　次

Ⅰ　調査にいたるいきさつ …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 4
　　A　区 …… 7
　　B　区 …… 10
Ⅳ　小　結 …… 14

Ⅰ．調査にいたるいきさつ

昭和５７年４月２０日の島根県土地利用調整会議の議題となった中電原発２号機増設に伴う造成工事（埋立地変更）については、当該地に遺跡の存在する可能性があるので遺跡有無の確認調査の必要ありとの県教委通知（昭和５７年４月２６日付）があった。

これを受けて鹿島町教委は、昭和５７年６月から７月中旬にかけて数次にわたり、県教委担当者と共に土地所有者中国電力株式会社の立会いのもと遺跡分布確認調査を実施した。

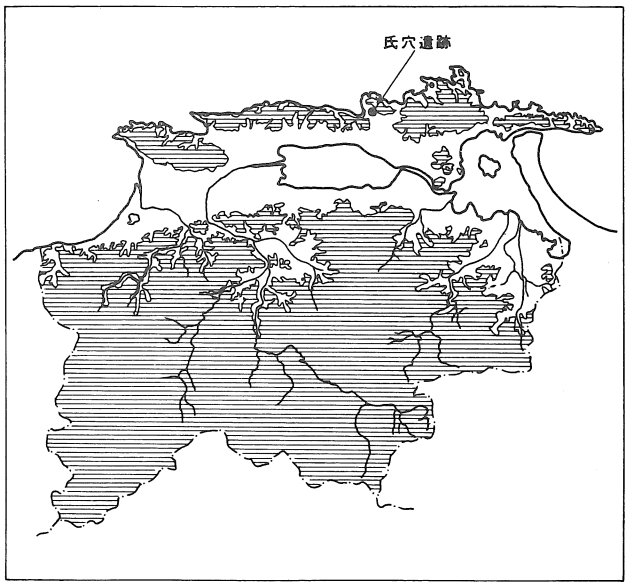
その結果、原発構内切り土予定地及び才津谷土捨場（埋土進行中）には遺構・遺物は認められず、本谷土捨場予定地は、樹木・下草が繁茂しており調査不能であった。また、資材運搬道路予定地には、本報告書の対象となる古墳１基を確認した。

この調査結果をもとに、事業者中電と鹿島町教委は協議を重ね、次のような合意に達した。

① 本谷土捨場予定地は、下草が枯れる時期に再度分布調査をする。

② 資材運搬道路予定地については、当該地が工事計画上の重要地点であるため計画変更は無理、との結論から発掘調査を実施する。

次いで、中電と町は調査委託契約を結ぶ一方、中電は昭和５７年７月３０日付遺跡発見届書及び、同年８月１日付発掘届出書を提出され、鹿島町教委は８月１日付発掘通知書を提出し、９月１日から約１ケ月間の発掘調査を開始するにいたった。　　（曽　田）



第１図　氏穴遺跡位置図

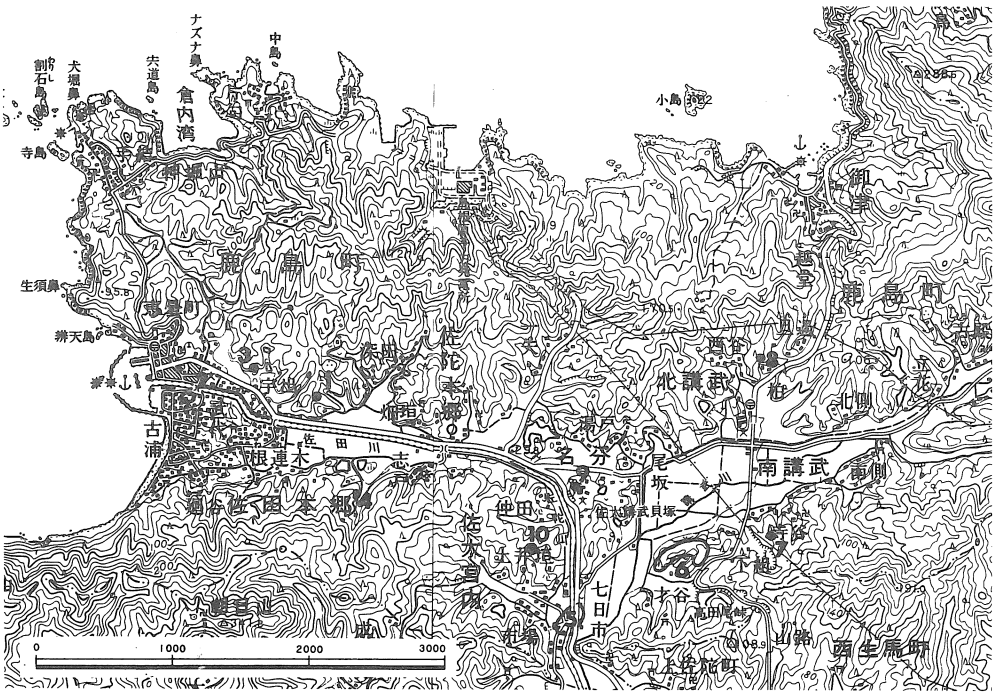
Ⅱ．位置と歴史的環境

氏穴遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷字氏穴２９１１－１番地他に所在する。この地点は、佐陀川下流域にひろがる平野の北側、池平山北東の谷奥部、標高約４０ｍの丘陵尾根上に位置している。この地点からは、北西に日本海とその良港恵曇港、眼下に佐陀本郷の水田地帯が見下され、やや谷の深い所ではあるが、交通・軍事的な側面からは、良好な地点である。

周辺には、縄文時代早期末から中期にかけての佐太講武貝塚があり、条痕文・爪形文などの文様をもつ縄文式土器をはじめ、石器・骨格器などが採集されている。[注1]

弥生時代に入ると、集落跡と考えられる佐太前遺跡[注2]、銅鐸２、銅剣６を出土した志谷奥遺跡[注3]が知られている。さらに日本海岸の砂丘下には、弥生時代前期から奈良時代頃までにかけての複合遺跡である古浦砂丘遺跡[注4]がある（第３図）。

古墳時代に入ると、総数４３基からなり、大形の古墳を中心にそれに中小の古墳が付き従うといった群構成をとる奥才古墳群[注5]（町教育委員会で調査中）があり、ここからは、仿



第２図　氏穴遺跡と周辺の遺跡（１／５０００００）

1.氏穴遺跡　2.古浦砂丘遺跡　3.狐堀古墳　4.志谷奥遺跡　5.佐太前遺跡
6.奥才古墳群　7.中尾谷山古墳群　8.岩屋古墳　9.大勝間山城跡　10.芦山城跡

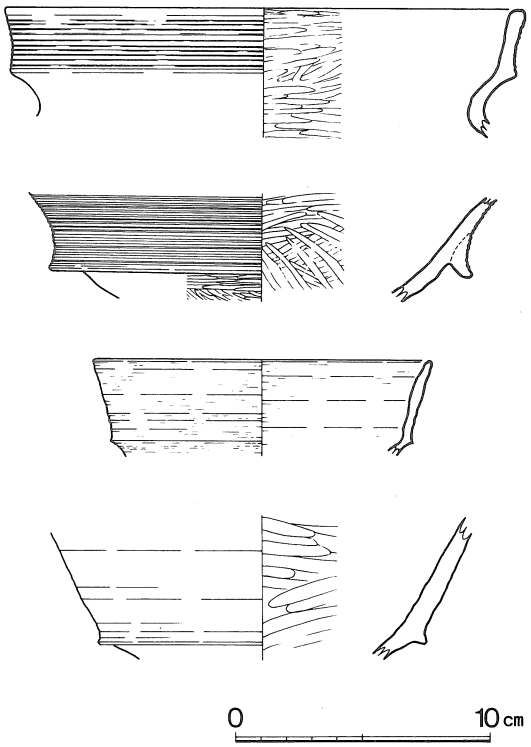
製内行花文鏡、方格文鏡、石製紡錘車、石釧などが出土している。この他にも、箱形石棺を有し、棺内に礫を敷く狐堀古墳[注6]が知られている。古墳時代も後期に至ると、北講武地区に石棺式石室を内部主体とする岩屋古墳[注7]など有力な首長の墓が築かれる一方、町内各地に横穴墓が作られる。内面ドーム形を呈する峰谷寺の上横穴群[注8]、やはりドーム形を呈し、古墳時代終末頃の寺尾横穴群[注9]（1979年町教委調査）などが知られている。

古墳時代以降では、『出雲国風土記』が著された8世紀代には、当鹿島町は、島根郡と秋鹿郡にまたがり、氏穴遺跡の存在する佐陀川下流域（佐陀川は江戸時代の開削）は、恵曇陂（とものつつみ）として記載され、一面の沼沢地であったようである[注10]。さらに河口付近は、恵曇浜として記され、集落のあったことが描かれている。

降って中世戦国期、毛利元就が尼子勢のたてこもる富田城・白鹿（しらが）城を攻略するため宍道湖北岸に荒隈（あらわい）城を築くと、その至近距離内にある加賀荘、佐陀荘も両陣営に分かれて攻防をくり返したようである。それらの遺跡として、殿山・海老山・大勝間・芦山・池平城跡など、相当の規模を有する城跡が知られている。これらの城のうちには、大勝間山城のように毛利・尼子の合戦の際に、戦場となり軍記物[注11]などにも名前のみえるものもある。

また、この当時は、農・漁業の他に、江角・恵曇地区では製塩も行われていたことが知られている他（多久和文書）[注12]、少し時代は降るが、佐陀浦・水之浦・おわし・加賀浦・野波浦など漁業だけでなく、船便を利用した交易も行われていたようであり（萩藩閥閲録、天正6年2月3日の条）[注13]、多様な生産・交易のあったことが窺え、興味深い。

近世には、佐陀川開削がなり（寛政1年、1789年）、宍道湖沿岸の水害が緩和されると同時に日本海側との水運による交易が開け、この地域に経済的発展をもたらした。



第3図　古浦砂丘遺跡出土土器実測図（1／3）

Ⅲ．調査の概要

氏穴遺跡は、佐陀川北岸、池平山から北東にのびる丘陵が、北と南西に分岐する地点に位置しており、佐陀本郷の水田地帯、恵曇港なども眼下に見渡せる立地である。標高は38ｍから４２ｍにかけてである。この部分で尾根は鞍部をなしており、北および南側は急峻な斜面となって谷へ降っている。

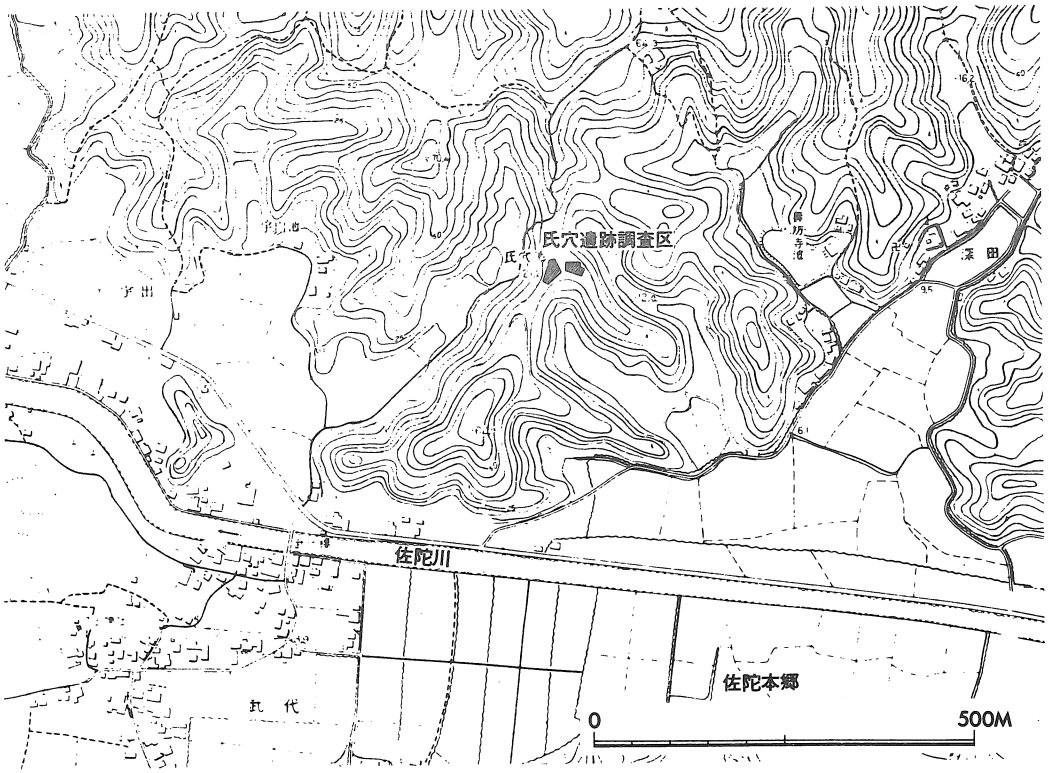
この鞍部に、古墳状の高まりの部分と、平坦面の部分とが認められ、それぞれをＡ区、Ｂ区と呼んだ。

Ａ区では、古墳として調査を開始したが、主体部等遺構は検出されず、古墳と判断することは困難であったが、調査区内各地点で、ピットが点々と認められた。

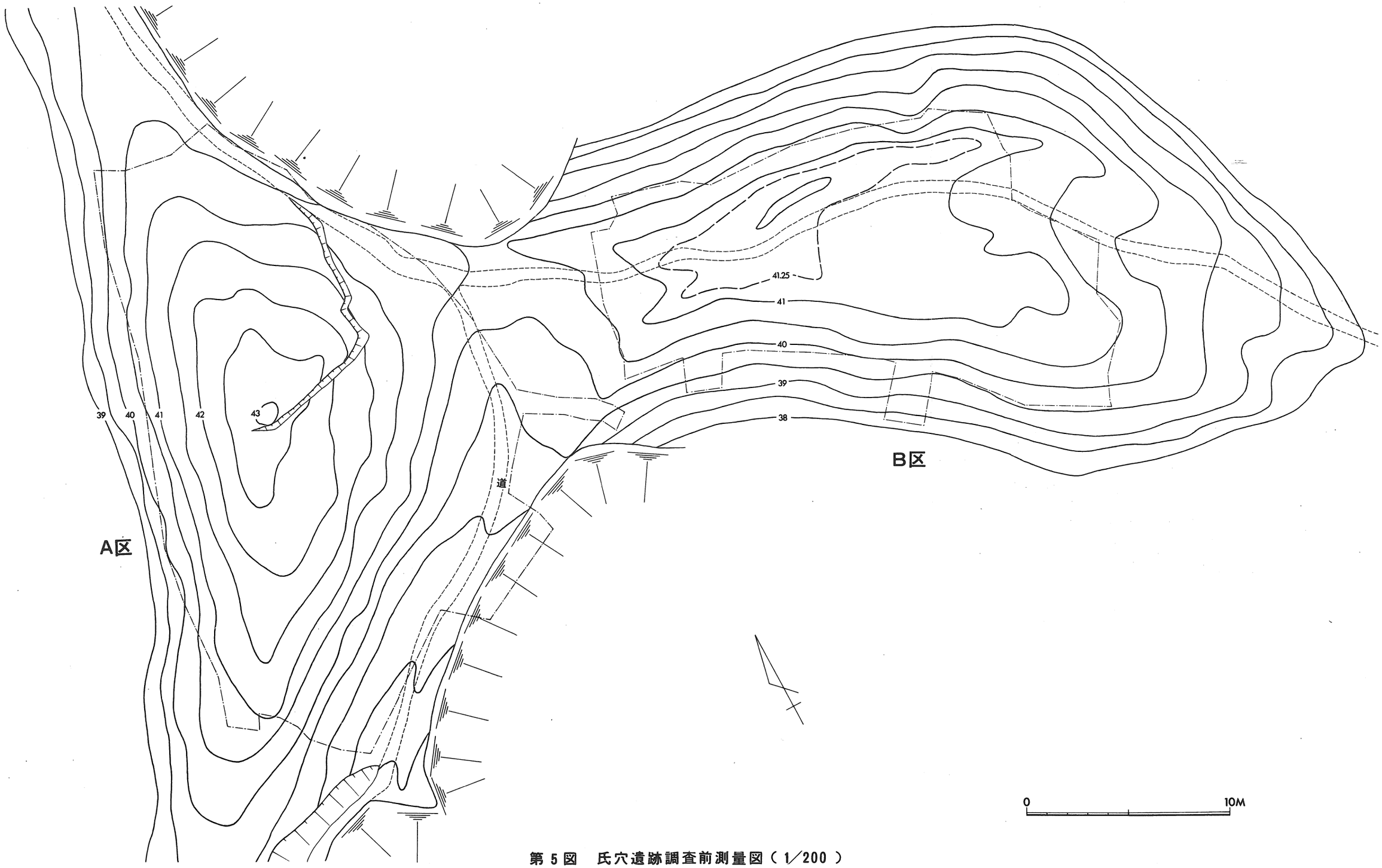
また、東側の斜面でも、道状の平坦面、さらにその下段では、ピット列が検出された。

Ｂ区平坦面では、掘立柱建物等の遺構は検出されなかったが、その北辺で盛土を行った土塁および、不整形な土坑が検出された。このＢ区は、北側に土塁を有し、南北斜面に柵をもち、隣接する池平城跡の北１郭と考えられる。

以下、調査区毎にその概要を記すこととする。



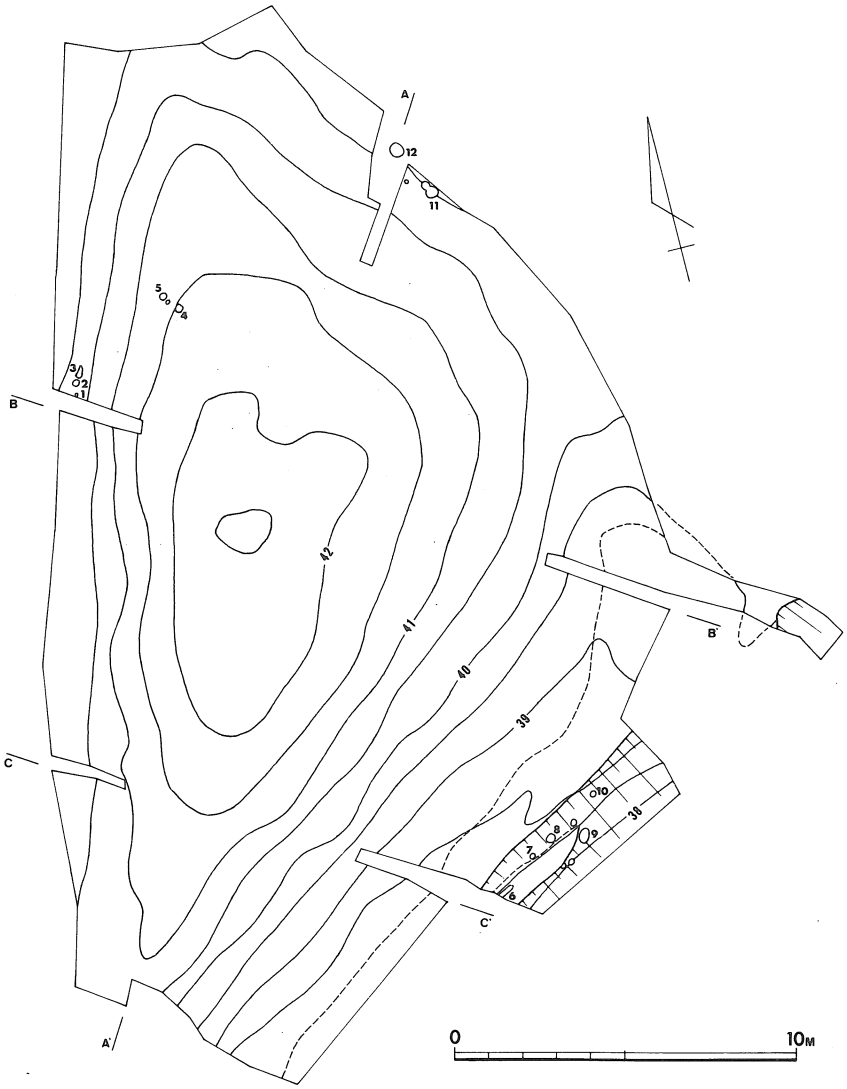
第４図　氏穴遺跡調査区位置図（１／10000）



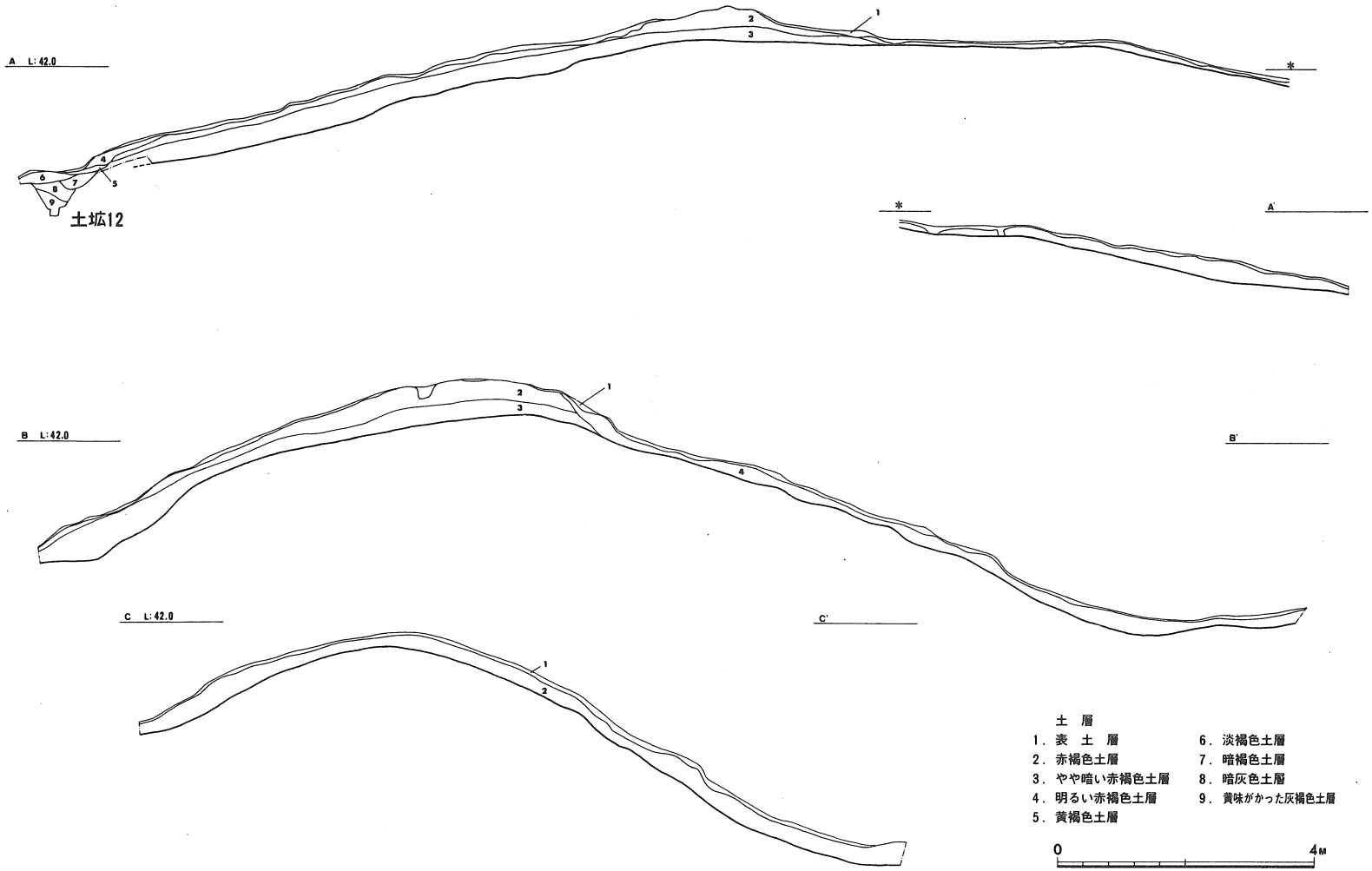
第５図　氏穴遺跡調査前測量図（１/200）

A　区　この調査区は、小形の古墳１基が存在すると推定されていたが、全面にわたって精査したが、古墳に関連すると考えられる遺構・遺物は検出されず、古墳と断定するには至らなかった。ただ調査区内各地点で、柱穴状のピットを１８個検出した。これらのピットは、その殆んどが規則的な配置はとらない。

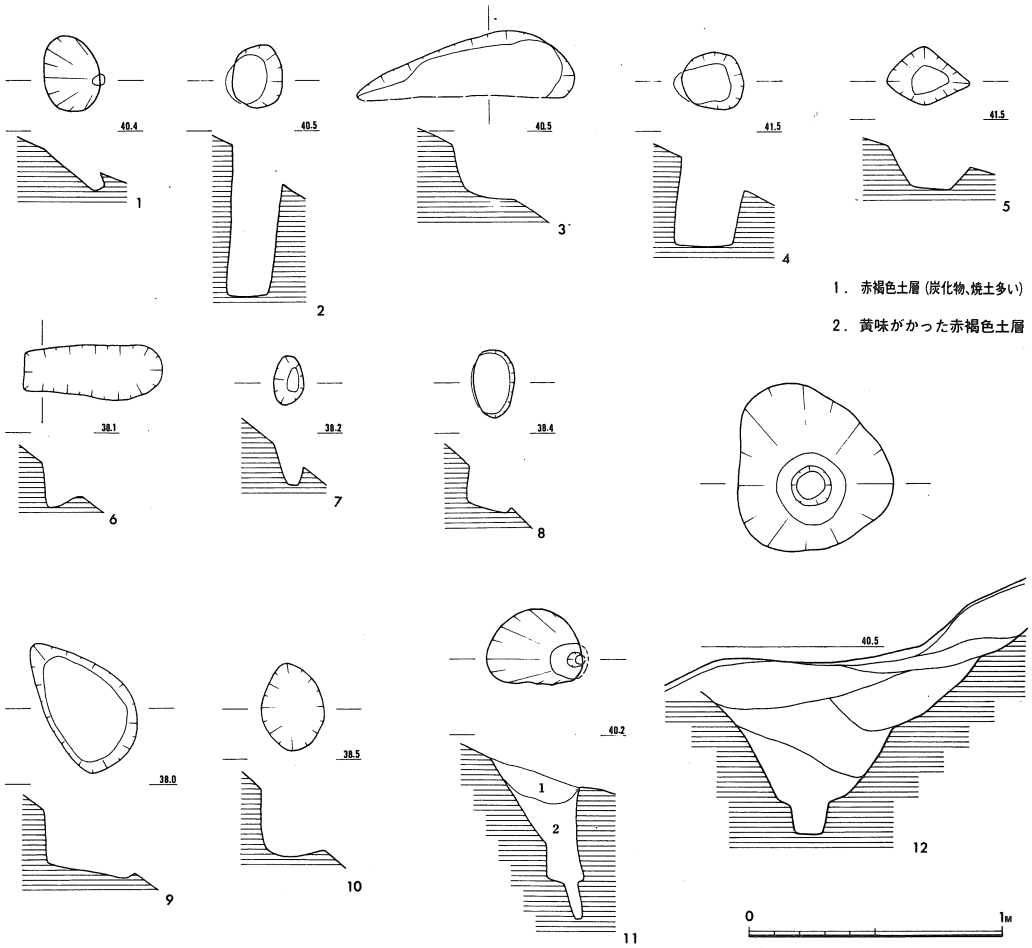
調査区東側で、幅約１.７ｍの平坦面が細長く検出されたが、これは地平城主郭から北１郭であるＢ区への通路的な役割を果たしていたものと考えられる。さらに、この下段から



第６図　Ａ区調査終了時測量図（1／200 ）



第7図　A区土層図（1／100）



第８図　Ａ区土坑実測図（1／30）

ピット群が検出され、標高約38.3 *m*前後に分布し、その位置から柵の柱穴と考えられる。これらのピットは、非常に浅いが、急な斜面のために上層の土砂が流失したものと考えられる。この柵は、上段の通路を下方谷部からの攻撃から防御するために設けられたと考えられる。

その他、調査区内各地点で検出されたピットは、いずれも黒褐色土がつまっているが、この土層内には多くの炭化物、焼土を含んでいる。ピットの径は、最大６２*cm*、最小１２*cm*で、深さは、最も深いもので５９*cm*、浅いもので１６*cm*である。いずれも規則的な配置はとらないが、東側斜面の柵列と同様に、防御的な役割を持たせた乱杭などの柱穴であろうと考えられる。

Ａ区のピット群は、後述するＢ区のそれと比較すると全体に大きく、深い。

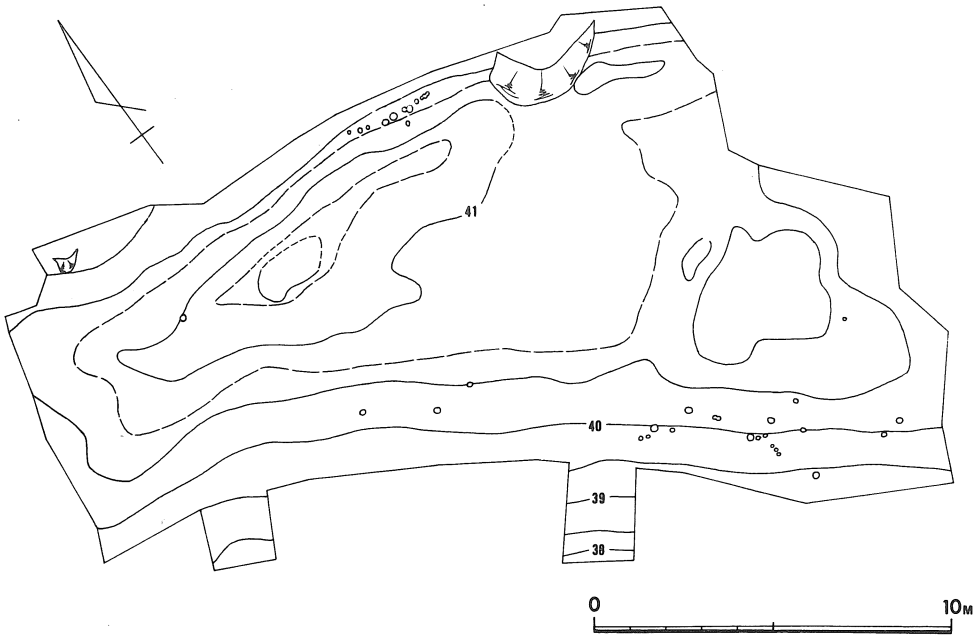
遺物は出土しなかった。

B　区（池平城跡北１郭）　B区は、池平山から延びる丘陵尾根が北と東に分れる地点に位置し、北東、南西二方が急な斜面となって谷に降っている。

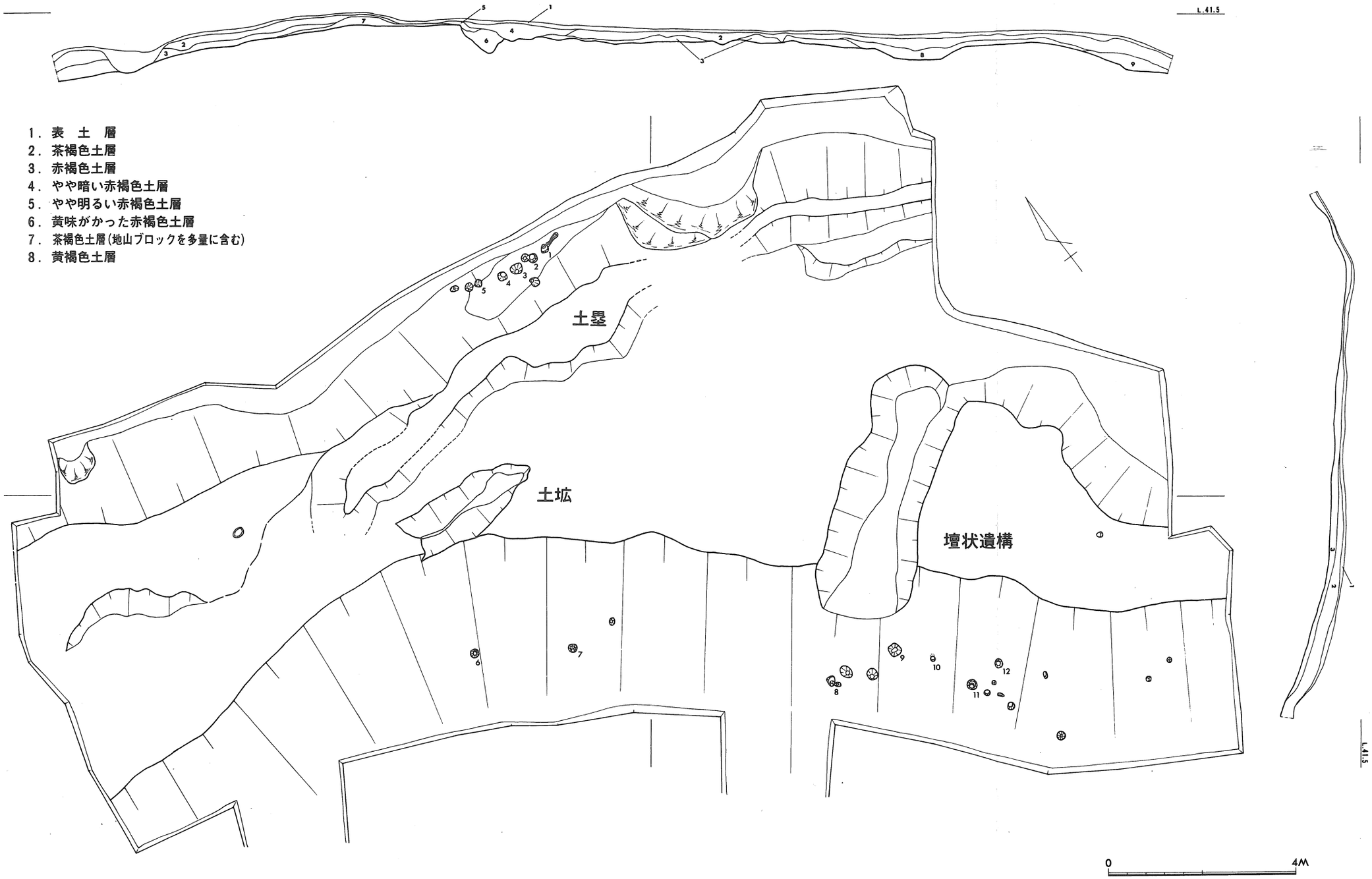
検出された遺構は、平坦面北側の低平な土塁、北と南の斜面に柵の柱穴と考えられるピット群、平坦面上の不整形な土坑等である。遺物は出土しなかった。

平坦面は、地山を削って作られており、全体に約２０cmほどの薄い堆積土層が認められた。土塁は、平坦面を作る際の削平された排土を盛って作られたと考えられる。保存状態はあまり良好でなく、長さ約15.2m、幅1.5m、高さ0.2mを測り、崩壊が著しく、地山土を盛った基底部のみが残存したものと思われる。

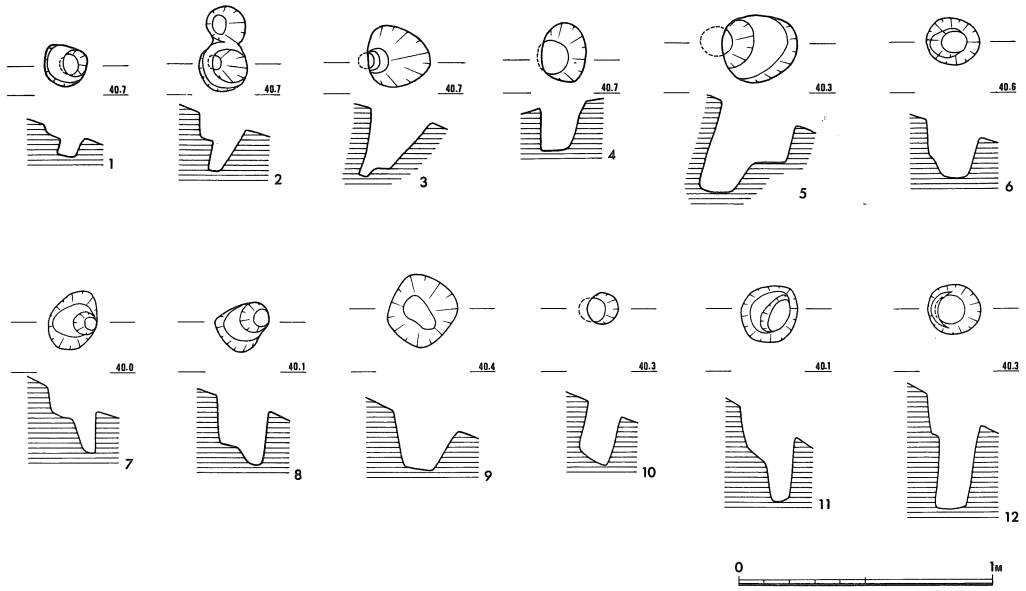
平坦面北側斜面の柵は、１０個の柱穴が標高40.5～40.75m前後にほぼ一列に並んで検出された。近いものでは、掘方をほぼ接して、遠いものでも約３５cmの間隔で、３m足らずのうちに並ぶ。部分的にしか検出できなかったが、土塁の外側にさらに柵列を設けており、この北側に防御の主眼がおかれているようである。南側斜面では２２個のピットが検出されている。規則的な配置はとらないが、ほぼ４０mの等高線に沿って分布しており、柵の柱穴と考えられる。相接して設けられたり、上下にふれたりしているので、何回かにわたって建てかえが行われているようである。B区の柱穴群もA区と同様、黒褐色土層の埋土に炭化物を多く含んでいるが、全体に小形で、径12.0～29.5cm、深さも13.0～46.0cmと浅い。



第９図　B区調査終了時測量図(1)（1／200）



第10図　B区調査終了時測量図(2)（1／100）



第11図　B区土坑実測図（1／30）

平坦面上の土坑は、郭の中心よりやや西に偏り、土塁の内側で検出され、長さ2.80 m、幅1.15 m、深さ0.60 mを測る。地山を雑に掘りくぼめただけのもので、用途は不明である。

平坦面の東側では、長さ約5.5 m、幅約1.8 m、深さ約0.3 mの溝を設けて、郭を切断し、方形台状の壇状の部分を造り出している。この方形壇上面では何らの遺構も検出されてはおらず、用途は不明であるが、この南側斜面で、柵の柱穴が集中して検出されていることも考え合わせると、この郭の防衛上、何らかの重要な役割を持っていたことは十分想像できるところである。[注14] さらに、この壇のすぐ北東は、傾斜がついてB区から南東にのびる細尾根へ続いており、道的な部分と考えられる。この続きの尾根には明瞭な郭は認められないが、この道状の部分がのびることも考えると、この尾根続きにさらに郭が存在していたことが想像される。

この池平城跡北1郭は、主郭部分からのびる尾根が、背後の山塊と尾根でつながる部分に位置し、この城の防衛上最も脆弱な部分をおぎなうために設けられたものと考えられる。しかし、主郭から大きく離れている上に、土塁・柵にしても、それほど強固なものでないことも考え合わせると、優勢な兵力で攻められた場合には、主郭方面へひきあげる捨郭的な性格のもののようである。

また、A・B両区ともに出土した柵の柱穴群がいずれも多くの炭化物を含み、ピットによっては焼土をも含んでいるのは、ピットに立てられた木杭等が激しく焼かれるような事があったためと考えられる。文献には見えないが、この城をめぐっての戦いが行われたことを示すものであろう。

Ⅳ. 小　　結

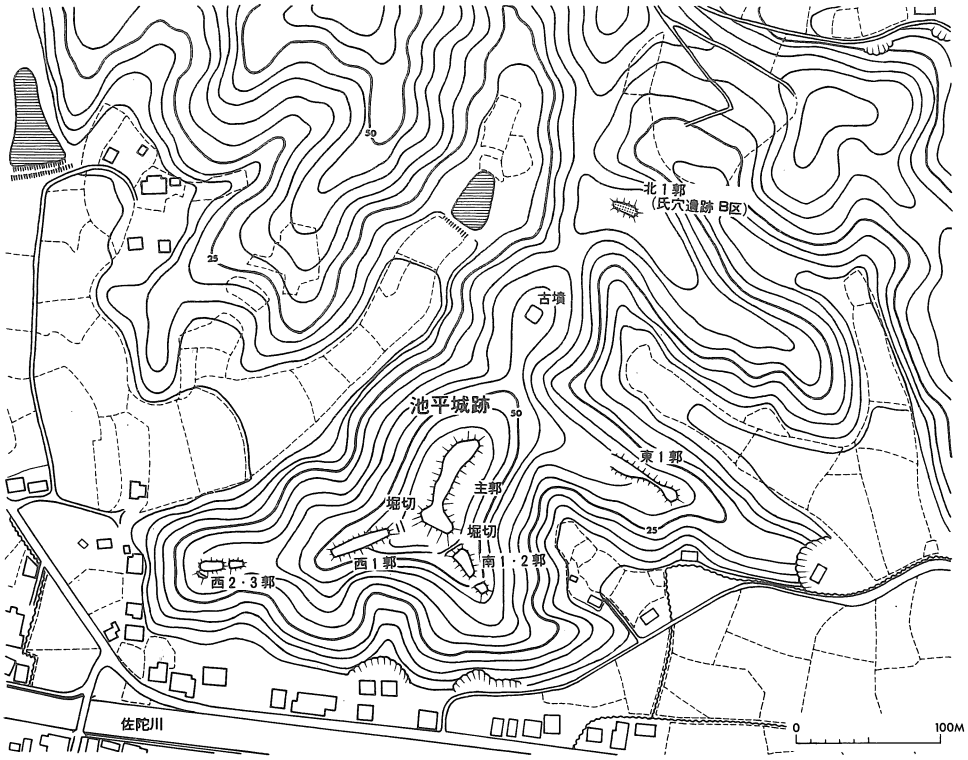
池平城跡の各斜面は急な傾斜となって谷に降る天険の地にあり、丘陵の細尾根を利用して８郭を設けている。この城の北１郭である氏穴遺跡Ｂ区は、大きく平野にせり出す丘陵が背後の山塊と連なる地点に位置しており、この城の搦手（からめて）となっている。

主郭は、長さ約７０ｍと長いが、幅は地形に制約されて８～１５ｍと狭い。主郭から西へのびる尾根には西１～３郭、南へのびる尾根には南１・２郭が設けられているが、それぞれの尾根と主郭の間は堀切によって切断されている。

西１郭は長さ約４０ｍ、幅約５ｍの細長い郭である。西２・３郭は丘陵突端に位置し、西方の海岸部を望むには絶好の地である。三方は急峻な斜面となって降っている。

南1・2郭は小さな郭群ではあるが、主郭との間の尾根は深い堀切によって切断されている。

主郭北東から南東へ派生する尾根には東１郭が位置しているが、ゆるやかな傾斜で降る尾根上では、郭の大きさはそれほど明瞭でない。地形からは、現在削られてはいるが、この東１郭の先端にもさらに郭が存在したことは想像に難くない。



第 12 図　池平城跡略測図（1／5000 ）

第 13 図　周辺の城跡分布図（1／75,000 ）

池平城跡は、ほぼ独立した丘陵を利用したかなり大形の城跡といえ、立地からは、佐陀本郷の平野および、恵曇地区の海岸線を見張る目的で築城されたものと考えられる。

文献上にも、この池平城跡は、わずかに見え、『雲陽誌』には、

「古城池平山といふ、城主朝山安芸守と云人なり」

とある他、「朝山家系図」[注15]によれば、池平城は応永６（１399）年、朝山昌時が築城し、昌時（安芸守）の後、昌景（肥前守）、貞昌（越前守）、利綱（安芸守）が拠り、利綱は芦山城も築き、尼子勢に属していたが、永禄５（1562）年、毛利勢との戦乱で一族のほとんどが戦死し、朝山家は一時断絶したが、その後再興し、佐太神社神主として現在に至っているといい、室町時代を通じて使用された山城であることがわかる。文献で年代の判明する山城としても貴重である。

注

1. 山本清「佐太講武貝塚」（『講武村誌』 ′55）
2. 山本清「佐太橋付近の弥生式遺跡」（『講武村誌』 ′55）
3. 『志谷奥遺跡』 鹿島町教育委員会 ′76
4. 金関丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」（『人類学雑誌』69－3、4）
5. 東森市良「日本海の三つの地域 出雲」（『歴史公論』 ′83. 3）
   赤沢秀則「奥才古墳群について」（『八雲立つ風土記の丘』 59）
6. 『鹿島の遺跡小集』 鹿島町教育委員会 ′79
7. 梅原末治・石倉暉栄「出雲における特殊古墳 中ノ中」（『考古学雑誌』 11－3）
   「岩屋古墳」（『菅田考古』 15 島根大学考古学研究会 ′79）
8. 注6に同じ。
9. 注6に同じ。
10. 加藤義成『校注出雲国風土記』′65による。
11. 香川正矩原『陰徳太平記』（正徳2年、1712）
12. 勝田勝年編『鹿島町史料』′76所収。
13. 注12に同じ。
14. 池平城主郭南端に同様の壇状の高まりが認められる。そこは、主郭上面でも最高所で最も眺望にすぐれた地点となっている。
15. 『八束郡誌』′26所収。

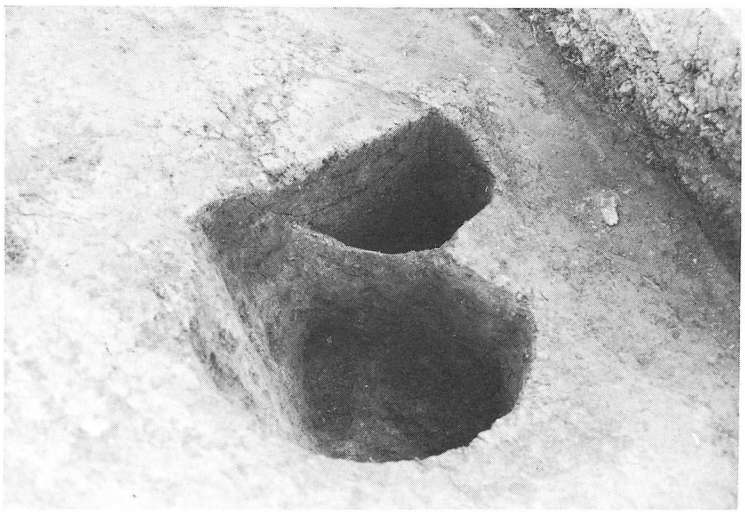
図　　版

氏穴遺跡遠景（北から、後方の小高い山が池平城跡）

氏穴遺跡調査終了時近景（東から）

A区全景

A区ピット群
（東側斜面）



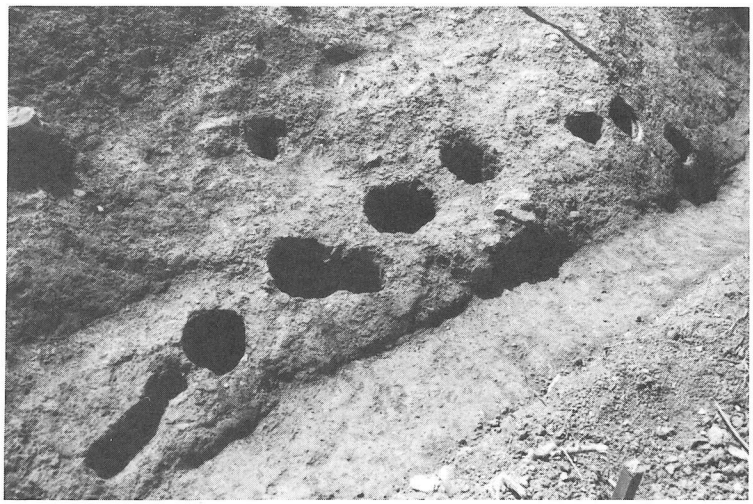
A区ピット接写

B区全景

B区南側斜面

B区土塁断面

B区ピット群
（南側斜面）



B区ピット群
（北側斜面）

氏穴遺跡発掘調査概報

1983年3月

発行　鹿島町教育委員会

印刷　有限会社 黒潮社